

公開シンポジウム

「雑誌『宝石』と戦後日本の探偵小説」報告

松田 祥平

二〇二二年九月四日、立教大学文学部文学科主催、立教大学日本文学会、江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、科学研究費（基盤研究B）「近代日本探偵小説研究の基盤整備…資料の調査・保存・公開とその活用」（代表：浜田雄介、二〇一九～二〇二二）共催で、「雑誌『宝石』と戦後日本の探偵小説」と題するシンポジウムが開かれた。

立教大学のホームページ (<https://www.rikkyo.ac.jp/events/2022/09/mknpps00001zavj.html>) に記載されている情報によれば、『宝石』とは一九四六年、岩谷書店から創刊された「日本を代表する探偵小説雑誌」なのだが、資料保存機関の予算の不足と収集方針の曖昧さによって、『宝石』のような読物雑誌の多くが保存されないまま稀覯雑誌になってしまった」ために、今回の登壇者たちは、科学研究費を取得し、探偵小説に関する資料の調査、収集、保存に取り組んできたという。今

回のシンポジウムは、戦後占領期に発行された『宝石』復刻版の作成と、その解題の執筆過程で明らかになったことを踏まえ、「出版文化史における『宝石』の役割を検証するとともに、『宝石』が日本の探偵小説にもたらしたものは何であったのか、そこから誕生した書き手や作品のちの探偵小説の可能性をどのように切り拓いていったのかを議論する」場として設けられたのであった。

報告者は総勢七名で、それぞれ年代記形式で一年毎の傾向を発表し、最後にディスカッションに戸川安宣氏を加え、議論が交わされた。

まずは石川巧氏が一九四六年の『宝石』について、雑誌や出版社の実像を探ったうえで、金田一耕助について語った。金田一耕助とは同誌の創刊号から年内にかけて連載された横溝正史の「本陣殺人事件」にて初めて登場した探偵である。

続いて金子明雄氏が一九四七年の状

況について、新人発掘が試みられたり、探偵作家クラブが創設されたりするなど、探偵小説界の安定化が図られるとともに、探偵小説を社会的に価値づけるために、防犯・治安上有益であると主張されるなど、斯界の政治性が最も前景化した時期であるとまとめた。

次に川崎賢子氏が江戸川乱歩の明智小五郎は大東亜共栄圏を移動する作家であったという話を呼び水に、移動という観点から、探偵小説ジャンルが有する文化の交通、交流、混濁する場というコンタクトゾーンとしての側面について語った。

続いて、山口直孝氏は急速な誌面の拡大にともなって、新作家を待望する機運が高まりはするものの、本格探偵小説を尊ぶ意識が共有され、トリックや謎解きが重んじられた一九四九年の状況は、新人作家の成長を阻む側面があったのではないかと指摘した。

休憩をはさんだ後、谷口基氏は一九五〇年の状況について、創作では戦後派作家から戦後派作家に執筆の主力が移行し、評論では本格探偵小説の再定義が試みられ、さらに、権利の関係から翻訳作品の紹介が一気に盛んになり始めた年であるとまとめた。

続く浜田雄介氏は一九五一年が当時

の編集長津川溶々の采配によりメディアとの繋がりを深めた年だとして、探偵小説と映画とラジオの関係性について述べた。

最後に、小松史生子氏は一九五二年のトピックスとして、雑誌の値下げや座談会の活発化などを挙げ、戦前における探偵小説の旗艦的なメディアであった『新青年』あがりの既成作家たちと新進作家たちとの間にある世代差の問題が浮上してきた年であったと指摘した。

休憩後のディスカッションでは、壇上でのやり取りのほか、様々な人々から意見、質問が投げかけられ、非常に盛り上がりを見せた。

一年毎に誌面の傾向を見ていくという方針によって、創刊当初の雑誌及び、戦時中の自粛状態から復活したてのジャンルの展開を動的に把握することができ、豊かな学びを得られる会となった。

(本学兼任講師)